

# 明治初期の初等教育における漢字使用の実態

——『世界商売往来』を中心に——

新 田 祥 絵

## 1. はじめに

『世界商売往来』は橋爪貫一が明治4年に著した本である。江戸時代を通して広く流布した『商売往来』から派生・発展した本の一つであり、西洋から新たに伝来した物品名が漢字表記で列挙されている。本書は明治時代の小学教則において単語読方の教科書として挙げられており、当時の教育現場で使用されていたと考えられる。

本書を開いてみると、「檣」<sup>ホバシラ</sup>「鷺鳥」<sup>シテウ</sup>(<sup>1</sup>)のごとく、現代の常用漢字表にはなく、知識がなければ読めない漢字が所々にあるほか、「爆丸」<sup>ボンベン</sup>「會社」<sup>ナカマ</sup>等、漢字の字音・字訓と振り仮名で示された読みとが一致しない語もある。これらの漢字は現代の感覚からすると、子どもが学ぶには難しいのではないかと思われる。

明治初期の漢字廃止論において重要な争点であったのが「教えるべき漢字が多すぎる」という問題であった。本稿では『世界商売往来』を資料として、その本文における漢字の実態を調査する。それによって当時の教育現場ではどのような漢字が教えるべきだとされていたのか、そして「教えるべき漢字が多すぎる」状態とはどういうことなのか、その一端を明らかにしたい。

### 1.1 明治初期における初等教育

明治5年(1872)の学制公布により、日本における近代教育は徐々に整えられていくことになる。明治初期の漢字教育にまつわる議論として挙げられるのがいわゆる漢字廃止論であろう。漢字廃止論は幕末に前島密が建白した「漢字御廃止之議」から始まり、やがてローマ字運動やかなもじ専用論などへと盛り上がりを見せていく。特に明治初期の漢字廃止論において問題視されたのが、「教えるべき漢字が多すぎる」という点であった。例えば、歴史学者三宅米吉の著した『文学博士那珂通世君伝』には、那珂が千葉師範学校校長時代に、「抑小学児童の教育に於て教師の最も困しむ所のものは児童をして許多の漢字を記憶せしむることなり」(<sup>2</sup>)と考えていたとある。ここから、当時の漢字教育が数多の漢字を暗記させるものであったことや、そんな漢字の詰め込み教育が問題視されていたことがうかがえる。

では、当時小学校の現場ではどのような教科書を用いて教育を行っていたのだろうか。学制が

公布された時期においては、現代のように教科書が整備されておらず、民間で発行された書籍を教科書として利用していた。その中身は小学校における具体的な教育内容を示した小学教則<sup>(3)</sup>に示されている。

漢字教育に関係する教科書にはどのようなものがあつたのか。小学教則には、下等第8級～第7級の綴字教科書として、初歩的な単語と文法事項とを記した『繪入智慧の環』と『ちえのいとぐち』が、下等第7級単語読方の教科書として『世界商売往来』が挙げられている。また、文部省は明治5年（1872）に「単語」の教科書として『単語篇』を出版している。

## 1.2 明治初期における漢字教育についての先行研究

明治時代における教育の現場で用いられていた漢字について言及した研究として、高梨信博（1988）がある。これは読本を対象に、国定教科書導入以前と国定教科書期に大きく期間を区切って、教科書に現れる漢字について調査と考察を行ったものである。国定教科書導入以前の資料としては教科書検定制度を導入後のものを扱っている。国定教科書導入以前についてみると、まず検定制度以前の教科書については、その漢字の字種・字数や掲出順に文字教育上の配慮がなされているとは認めがたいとしている。検定制度導入に至り、読本は読むだけではなく書くための教材という意図をもって編集されるようになったという。また、明治33年の「小学校令施行規則」の漢字表が示されて以後、おおむね漢字表の枠内に収斂してきており、「小学校令施行規則」の漢字表が読本の漢字の骨組みを作る上で大きく影響したともいう。国定教科書導入後についてみると、一期では配当漢字が少なく、振り仮名つきで用いられる配当外の漢字が多い一方、六期では配当漢字は少ないが、配当外漢字は更に少ないということが明らかになっている。すなわち、一期では漢字の使用を全体として制限していないが、六期では明確に漢字が制限されていたのである。なお、一～六期の教科書に提示されている漢字の中には「常用漢字表」外の漢字が含まれていたほか、「常用漢字表」にあつて教科書に一度も提示されていない漢字も存在していた。

このように少なくとも読本においては、その掲出漢字の選択に教育制度や教科書の編纂方針の影響が見られる。特に、教科書に使用される漢字が「小学校令施行規則」の漢字表や「常用漢字表」に沿うようにして変遷していくところを見ると、「単語」の教科書における漢字がその後の国語の教科書にどうつながっていくのかを考える必要があると思われる。それが明治初期における「漢字が多すぎる」状態を浮き彫りにした上で、どのように収斂していったかという漢字教育の流れを明らかにすることに繋がるだろう。

## 1.3 本稿の目的

近代教育の黎明期において、どのような漢字が学習の対象とされていたかを明らかにすることは、漢字教育の歴史を明らかにする上で重要である。そのためには明治初期刊行の教科書にどの

ような漢字が現れているかを調査する必要がある。また、その教科書に用いられている漢字が、他の教科書においても同様に使用されているか、その後出版された教科書においても同様に用いられているかについても考察を行う必要があるだろう。

本稿では橋爪貫一著『世界商売往来』を資料として、そこに現れる漢字の字数や字種、用法について調査を行う。本書は江戸時代以来の往来物の流れを汲んでいるが、同時に日本へ新たに入ってきた品物が列挙されており、同時に取り上げられている品物を英語で示すという試みもなされている。本書に現れる漢字について調査することで、近代初期の、特に初等教育に必要とされた漢字の様子が明らかになると考える。

併せて、他の資料との比較も行いたい。本書と同時期に出版された『改正商売往来』、『世界商売往来』の元祖ともいべき『商売往来』との比較を行い、各資料に共通して現れる漢字がどれほどあるのかを調査する。同時に、本書に現れる漢字がその後も用いられるかについても調査するため、『言海』と『日本国語大辞典』<sup>(4)</sup>並びに大正8年の「漢字整理案」掲出字と大正12年の「常用漢字表」<sup>(5)</sup>掲出字も参照する。

『世界商売往来』をはじめとした明治期の教科書に現れる漢字について調査を行った研究は乏しいため、本稿によってその不足を補いたい。

## 2. 資料

### 2.1 著者について

『世界商売往来』を著したのは橋爪貫一である。橋爪の著作活動について調査した三好信浩(1990)によると、橋爪の詳細な経歴は明らかになっていないという。ただ英学に明るく、明治初期に精力的な著作活動を行っていたことが判明している。三好の調査では明治元年から明治14年にかけて71件の著作が確認されている。著作の内容は多岐にわたっている。三好は橋爪の著作の特徴について、読者に子ども・初学者を想定し、彼らが独学でも実用的な学問を身につけられるように平易な文章を以て著したとまとめる。「独学」や「実用のための学習」という観点は江戸時代以来の伝統的な学習観であり、教育制度が充実し西洋式学問を習得した学者によって近代的な教科書が整備されることでその役割を終える。

しかしながら、橋爪の豊富な著作は明治初期の啓蒙活動において重要な一角を成しており、同時に近世と近代の中間点に位置していると言えよう。その橋本の著作の中でも、『世界商売往来』は橋爪を有名にした著作物である。

### 2.2 『世界商売往来』について

『世界商売往来』は明治4年の序文を有し、雁金屋清吉の手で出版された。本書は『商売往来』の類書の一つである。もともと『商売往来』は元禄7年(1694)に出版された本である。商業活

動に必要な知識である貨幣名や商品名を列挙するとともに、商人生活の心得も説いている。『商売往来』は江戸時代を通して類書も含め数多く刊行され、明治時代になっても出版が続けられた。明治以降は、外国から取り入れた新たな物品の名前を列挙した新しい『商売往来』が登場する。本書もこうした新しい『商売往来』の一種である。

本書の特徴は4つにまとめられる。

#### (1) 挿絵

本書に収録されている語の一部は挿絵によってその形状が示されている。挿絵があるのは主に船舶関連、衣服関連、食物、動植物名である。その物の名を初めて目にする読者の理解を補うためであろう。

#### (2) 頭書

本書の頭書部分には本文中に登場した単語と、それに対応する英単語が掲げられている。また、英単語の右側には片仮名で発音が示されている。ただし中には「hurricane 颶風」の如く英語の綴りをローマ字読みしたかのような例や、「brush 毛掃」の如く誤りと思われる例が散見される。頭書に掲げられた語は基本的に本文に登場した順に並んでいるが、一部本文と順序が異なっている場合があるほか、紙幅の都合からか飛ばされている語が複数存在する。

#### (3) 振り仮名

本文に使用されている漢字のほとんどにカタカナで振り仮名が付されている。振り仮名は基本的に漢字の右側に付されているが、一部左右両方に付されている場合がある。例えば「遠望鏡」の右側の振り仮名は「エンボウキヨウ」と読みを示し、左側の振り仮名は「トホメカネ」と意味を示している。

#### (4) 注

本文所載の国名・船舶関係の語の一部には割注が挿入されており、国の位置や首都、船舶関係の部品の機能を説明している。

『世界商売往来』は明治4年に出版されたが、翌明治5年には『続世界商売往来』が、明治6年には『続々世界商売往来』『世界商売往来補遺』が出版されている。

### 2.3 『世界商売往来』の先行研究

本書を考察の対象とした研究として、天野晴子・石川松太郎(1987)および谷清子(1989)がある。天野・石川(1987)は、『世界商売往来』と続編における語彙の調査で、その性格が「ひろく新時代の生活や労働に適応できる社会的・家庭的な語彙教科書的な性格」(p.39)であるとしている。中でも食生活関連の語彙に注目し、『商売往来』の語彙が『世界商売往来』にどれだけ引き継がれているかを調査している。その結果、食品や嗜好品、食器類において、『世界商売往来』系に西洋由来の新たな品々が掲載されるようになった一方、近世以来の『商売往来』

系諸本に掲載されていた地方特産品が引き継がれていないという傾向が明らかになった。天野・石川（1987）は語彙に関する調査であって、直接漢字の研究には関わらないが、『世界商売往来』における新規掲載語、『商売往来』諸本から引き継がれた語・引き継がれなかった語それぞれが見せる様相の違いが、漢字という単位で観察したときにどうなるかという検討も可能になるだろう。

谷（1989）は、『世界商売往来』シリーズの頭書部分に掲載されている英単語についての考察である。谷（1989）は橋爪が参照した可能性のある英語学習書を数種類掲げた上で、頭書の英単語の綴りと発音表示を分類し、オランダ訛りや米国式発音の影響が見られることを指摘した。本稿では頭書部分については触れないが、明治初期に出版された新しい「商売往来」における英語をはじめとした外来語とその音訳漢字・翻訳語の漢字表記については稿を改めて検討したい。

## 2.4 本稿で扱う資料

本稿では早稲田大学図書館蔵の『世界商売往来』を考察の中心とする。そのほか、同時期に出版された早稲田大学図書館蔵の『改正商売往来』<sup>(7)</sup>と、明治初期の小学校で使用された単語の教科書『単語篇1・2』<sup>(8)</sup>を適宜比較対象とする。

『改正商売往来』は黒田麴盧<sup>(9)</sup>の著で、『世界商売往来』の2年後に出版された書である。『世界商売往来』と異なり挿絵や頭書は存在しないが、『世界商売往来』同様に舶来の品々や海外の地理、商売の心得について述べている。

『単語篇』は明治5年に文部省から出版された単語の教科書である。3冊に分かれており、部門ごとに漢字で語が列挙されている。高木まさき（1992）によると、明治7年時点で36府県中27府県において出版され、幅広く流布していたという。

更に、『世界商売往来』の元祖というべき『商売往来』2冊<sup>(10)</sup>も比較対象に加えた。

辞書の見出しの表記との比較も重要だと考え、江戸時代後期の節用集である『大全早引節用集』<sup>(11)</sup>、明治期の辞書として『言海』、現代の辞書として『日本国語大辞典』を使用した。

## 2.5 『世界商売往来』における語彙の分類

『世界商売往来』に掲載されている語は17の分類にまとめられる。以下にその分類名と詳細、語例を示す。

(1) 国家	国名	イギリスコク ロッシア イタリー 英吉利國、義羅斯、以太里
(2) 天地	天候・地理	バウフウ アサヒ タイヨウ 暴風、浅背、大洋
(3) 船舶	船の種類・部品名・航海道具	ヒキヤクセン ホバシラ ジシヤク 飛脚船、櫓、磁針盤
(4) 軍事	武具・銃の種類	ツ ツ モルチール ボンベン 炮銃、忽微礮、爆丸
(5) 商業	店の役職等	ハントウ カブツ ナカマ 主管、貨物、會社

(6) 服飾	生地・洋服の名前・装飾品	ビロウド ウハカケ ユビワ 天鷲絨、外套、指環
(7) 飲食	洋酒・食品・食器類	サンハンシユ チヨコレート ホルク 三鞭酒、知古辣、食叉
(8) 日用品	文具等の日用品	スミ テスグヒ シヨクダイ 墨汁、手巾、燭臺
(9) 馬車	馬車の部品名等	タヅナ ジヨウシヤ ジク 手綱、乗車、軸
(10) 金属	金属・宝石	テツ フリツキ コンゴウセキ 鉄、鐵葉、金剛石
(11) 農工業	農業・手工業で使う道具	スキ クギスキ カナトコ 鋤、千斤、鉄砧
(12) 青果	穀物・野菜・果物	コメ ニンジン ナシ 米、胡蘿蔔、沙梨
(13) 樹木	樹木名	マツ マルバヤナギ ラクヨウシヨウ 松、白楊、落葉松
(14) 動物	哺乳類の名前	オウマ ネコ ハリネズミ 牡馬、猫、蝟
(15) 鳥類	鳥の名前	ヒ バリ クジヤク フクロフ 告天子、孔雀、梟
(16) 魚貝類	魚貝類の名前	ニ シン イソカイ ウナギ 糟白魚、渚菜、鰻
(17) 昆虫類	昆虫と爬虫類の名前	ヒキガヘル ハイ テ ウ 蟾蜍、蠅、蛭蝶

『商売往来』では、およそ(1)商取引関係(2)穀類(3)調味料(4)服飾(5)武具(6)家財(7)薬種・香料(8)鳥・魚類(9)その他のようにまとめられる。

また、『改正商売往来』では、「凡例」に「商法會社」「山物類」「金石類」「植物類 米穀野菜」「動物類 家畜山海鳥獸」「工産物類 衣食器械 家什諸具」「兵器類 醫術器械 薬種」「曆法大意」「海外旅商」と示されており、おおよそこの順に語が列挙されている。なお、「曆法大意」では西暦や七曜の仕組みを解説し、「海外旅商」では海外の地理や船の運賃、人との付き合い方が述べられるなど単語の列挙ではない箇所もある。

『単語篇1』では「數」「方」「形」「色」「度」「量」「衡」「貨」「田尺」「時」「天文」「地理」「居處」「人倫」「身體」「衣服」「布帛」、『単語篇2』では「方」「形」「色」「天文」「時令」「地理」「居處」「飲食」「器財」「金石」「穀菓」「果類」「草木」「鳥獸」「魚蟲介」の各部門が立てられている。

### 3. 分析

#### 3.1 使用漢字数と使用率

はじめに『世界商売往来』『商売往来 a・b』『改正商売往来』各資料における総文字数を数えた。文字数は本文のみを数え、頭書・振り仮名・割注・序文・広告等は除外した。また、踊り字・記号類も数えていない。結果は下の通りである。

『世界商売往来』	『商売往来 a』	『商売往来 b』	『改正商売往来』
1,036字	1,038字	1,008字	2,451字

次に各資料における延べ漢字数と、総文字数に占める延べ漢字数の割合<sup>(12)</sup>を調べた。延べ漢字数も総文字数同様、本文に現れたもののみを数えた。

明治初期の初等教育における漢字使用の実態

『世界商売往来』	『商売往来 a』	『商売往来 b』	『改正商売往来』
895字	1,038字	1,008字	1,902字
86.4%	100%	100%	77.6%

『商売往来』は2種とも変体漢文で書かれているため、総文字数に占める延べ漢字数の割合は100%となる。『世界商売往来』では86.4%、『改正商売往来』では77.6%である。『世界商売往来』本文はほぼ単語の列挙であり、仮名は「リキユール」「エール酒」等ごく一部の名詞と助詞で使われている程度である。また、「なり」等の文末表現もほとんど見られない。動詞もほとんど使われていないため、その送り仮名もない。結果として、『改正商売往来』よりも漢字の割合が多いと考えられる。一方の『改正商売往来』では一部の名詞と助詞で仮名が使われているほか、「なり」「べし」といった文末表現が見られる。また、動詞も『世界商売往来』に比べて多く使われており、その送り仮名も本文に示されているために、『世界商売往来』よりも漢字の割合が少なくなっていると考えられる。

次に、異なり漢字数について見る。ここでは、各資料で使われた漢字の種類を数えた。すなわち、同じ漢字は複数回出現しても1と数える。なお、異体字の関係にある漢字は集計の便宜上、異なる漢字と見なしている。結果は次の通りである。

『世界商売往来』	『商売往来 a』	『商売往来 b』	『改正商売往来』
606種	652種	639種	875種

また、本文中において1回しか用いられない漢字と、2回以上現れる漢字の数はこのようになる。

出現数	『世界商売往来』	『商売往来 a』	『商売往来 b』	『改正商売往来』
1回のみ	442種	467種	461種	527種
2回以上	164種	185種	178種	348種

本文中において1回しか用いられない漢字が異なり漢字数に占める割合は『世界商売往来』が72.9%、『商売往来 a』が71.6%、『商売往来 b』が72.1%、『改正商売往来』が60.2%であった。4つの資料すべての漢字種において、半数以上が1回しか用いられない漢字なのである。様々な物品名を列挙するという資料の性質上、漢字が多種にわたって繰り返し現れにくいのであろう。また、同じ語が繰り返し現れないという点も関係すると考えられる。

ではそれぞれの資料において、複数回現れた漢字にはどのような例があるかを見る。それぞれ使用回数の多かった上位5位は、

『世界商売往来』

- 「馬」11回 (白馬<sup>シロブドフシユ</sup>乳酒、馬衣<sup>ムマキヌ</sup>、牡馬<sup>オウマ</sup>、借馬<sup>シヤクバ</sup> 等)
- 「大」9回 (大に<sup>オホヒ</sup>、莫大小<sup>メリヤス</sup>、大桶<sup>オオツケ</sup>、大麦<sup>オオムギ</sup> 等)
- 「小」9回 (小旗<sup>コバタ</sup>、莫大小<sup>メリヤス</sup>、小桶<sup>コオケ</sup>、小麦<sup>コムギ</sup> 等)

「子」8回（<sup>シユス</sup>繻子、<sup>ミミカキ</sup>空耳子、<sup>ヤシ</sup>椰子、<sup>ヒバリ</sup>告天子 等）

「石」7回（<sup>ヒウチイシ</sup>燧石、<sup>シヤボン</sup>石鹼、<sup>セキバン</sup>石盤、<sup>セキヒツ</sup>石筆 等）

#### 『商売往来 a』

「之」34回（助詞33例 <sup>これ</sup>之 1例）

「子」15回（<sup>きんす</sup>金子、<sup>しゆす</sup>繻子、<sup>なしち</sup>梨子地、<sup>しそん</sup>子孫 等）

「可」10回（助動詞）

「也」9回（助動詞）

「物」8回（<sup>たんもの</sup>端物、<sup>そぶつ</sup>籠物、<sup>わもの</sup>和物、<sup>めいぶつ</sup>名物 等）

「香」8回（<sup>かうろ</sup>香爐、<sup>かうほ</sup>香合、<sup>じやかう</sup>麝香、<sup>ういきやう</sup>茴香 等）

#### 『商売往来 b』

「之」28回（助詞25例 <sup>これ</sup>之 3例）

「子」13回（<sup>きんす</sup>金子、<sup>しゆす</sup>繻子、<sup>なしちの</sup>梨子地、<sup>しそん</sup>子孫 等）

「可」10回（助動詞）

「也」9回（助動詞）

「者」9回（助詞）

#### 『改正商売往来』

「石」21回（<sup>ぎやまん</sup>金剛石、<sup>せうせき</sup>硝石、<sup>せきくわい</sup>石灰、<sup>いしり</sup>石入 等）

「又」19回（接続詞）

「十」19回（<sup>じふ</sup>十と、<sup>じふご</sup>十五、<sup>にじふに</sup>二十二、<sup>しふろくわん</sup>十六貫 等）

「金」17回（<sup>ぎやまん</sup>金剛石、<sup>いも</sup>金薯、<sup>ぼつきん</sup>罰金、<sup>ぜんきん</sup>前金 等）

「一」16回（<sup>いつしん</sup>一新し、<sup>うにこゝる</sup>一角、<sup>いちにち</sup>一日を、<sup>ひとめぐり</sup>一週 等）

「品」16回（<sup>ひんしゆ</sup>品種なり、<sup>しよくひん</sup>食品は、<sup>ぶつびん</sup>物品は、<sup>しな</sup>品を 等）

「子」16回（<sup>もつしよくじ</sup>没色子、<sup>やし</sup>椰子、<sup>にくさじ</sup>肉叉子、<sup>ぼうし</sup>帽子 等）

となる。

『商売往来 a・b』では助詞として「之」「者」、助動詞として「可」「也」が使用回数の多い漢字となっている。これらの漢字は『商売往来』が変体漢文で書かれているからこそ現れた特徴と言える。一方で、『世界商売往来』『改正商売往来』ではこれらの漢字は上位に入っていない。『世界商売往来』では文末表現がないため、これらの漢字も使用されなかったのである。『改正商売往来』では「べし」や「なり」で文が結ばれているが、ひらがなで書かれているために、やはりこれらの漢字は現れなかった。『商売往来』が変体漢文で書かれており、『改正商売往来』も仮名

## 明治初期の初等教育における漢字使用の実態

書きではあるが「べし」「なり」等で文が結ばれている一方で、『世界商売往来』ではこうした表現が見られない。これは『世界商売往来』の特徴の一つと言えるだろう。『商売往来』の系譜に連なるとはいえ、文体は必ずしも『商売往来』に倣っていないのである。

「之」「者」「可」「也」以外で使用回数の多い漢字は、ほとんどが名詞に使われている漢字である。これらの漢字は特定の分類に固まって現れるのであろうか。特に『世界商売往来』において特筆すべき点があるのかを見たい。

上に挙げた『世界商売往来』で使用回数が多い上位5位の漢字がどの分類に用いられているかを見ると、

「馬」 軍事1 飲食1 馬車3 青果1 動物5  
「大」 天地1 船舶2 服飾2 日用品1 青果1 魚貝1 その他1  
「小」 船舶2 商業1 服飾2 飲食1 日用品2 青果1  
「子」 服飾3 飲食2 日用品1 青果1 鳥類1  
「石」 飲食1 日用品3 貴金属2 農工業1

となった。「馬」が「動物」に5回と、使用回数11回のうち半数近くに集まっている以外は、ある漢字が特定の分類に固まっているわけではないようである。念のため、使用回数6回で使用順位6位の漢字3種を見ると、

「船」 船舶5 軍事1  
「衣」 服飾5 馬車1  
「魚」 魚貝類6

であった。これら3つの漢字は「船舶」「服飾」「魚貝類」にそれぞれ集中している。

なお、『商売往来 a・b』『改正商売往来』について見ると、

『商売往来 a』

「子」 商取引2 服飾4 家財3 薬種・香料4 鳥・魚類1 その他1  
「物」 服飾4 武具1 家財3  
「香」 家財4 薬種・香料4

『商売往来 b』

「子」 商取引2 服飾4 家財3 薬種・香料2 鳥・魚類1 その他1

『改正商売往来』

「石」 山物類10 金石類2 家畜山海鳥獣1 衣食器械5 薬種3  
「十」 暦法大意11 海外旅商8  
「金」 金石類5 米穀野菜1 衣食器械6 海外旅商5  
「一」 商法會社1 家畜山海鳥獣1 暦法大意7 海外旅商7  
「品」 山物類2 金石類3 米穀野菜2 家畜山海鳥獣2 衣食器械2 家什諸具1

### 兵器1 海外旅商3

「子」 米穀野菜4 衣食器械8 醫術器械2 藥種2

となる。これらの結果を見ると、「子」「品」「金」のごとく様々な分類にまたがって出現する漢字と、「香」「石」「十」「一」のように、ある分類に偏って現れる漢字とが見られる。仮に様々な分類にわたって現れる漢字が使用回数の上位を占めていれば、その漢字はその資料における基本的な漢字であると言えるだろう。『商売往来』に見える「可」「也」はそれにあたり、文の基礎を成していると考えられる。あるいは、もし『世界商売往来』に見える「馬」や「船」といった漢字が特定の分野に偏って使われ、延べ漢字数のかなりの部分を占めるということがあれば、やはり『世界商売往来』を特色づける漢字と言えるだろう。しかしながら本書においては、飛びぬけて使用回数が高い漢字は見られなかった。これは本書が特定分野の語彙を集中的に集めたのではなく、様々な分野から語を収集したためであろう。この点は『改正商売往来』も同様である。ただ収録分野の違いから使用回数の上位になる漢字も異なるのだと思われる。

### 3.2 各資料に共通して出現する漢字

次に、『世界商売往来』で使用されている漢字のうち、比較対象の資料とも共通している漢字がどれだけあるかを見たい。ここで比較対象とするのは『商売往来 a・b』『改正商売往来』『単語篇 1・2』である。『世界商売往来』の漢字がこれらの資料とも共通しているほど、その漢字は一般性が高い漢字、基本的な漢字と言えよう。いずれの資料も語彙集であるから、名詞が全体の大半を占めている。そのため品詞による用法の違いに注意する必要がさほどない。その漢字が同じ名詞という枠において、資料間で共通して見られるならば、より一般性が高まるのである。また、どの資料も子どもや初学者を読者の対象としている。すなわち、これらの資料に現れる漢字は、著者が「読めるようになってほしい」と意図した漢字であると言える。以上の点から、各資料に共通する漢字は基本的なものであると考える。

『世界商売往来』の漢字606種のうち、比較対象と共通する漢字の異なり数<sup>(13)</sup>は次のとおりである。

『商売往来 a』	『商売往来 b』	『改正商売往来』
197種	198種	297種
『単語篇 1』	『単語篇 2』	『単語篇 1・2』
72種	138種	193種

『世界商売往来』の漢字種のうち、『商売往来 a』と共通するのが32.5%、『商売往来 b』が32.7%、『改正商売往来』が49.0%、『単語篇 1』が11.8%、『単語篇 2』が22.7%、『単語篇 1・2』が31.7%であった。この結果を見ると、『改正商売往来』が『世界商売往来』と最も高い共通性を有していることがわかる。



時に、比較対象の資料においてこれらの漢字は知る必要があるとは考えていなかったと言える。

次に『世界商売往来』所載の漢字が明治～大正にかけて整理された「常用漢字表」に相当する漢字表とどれだけ共通するかを示す。本稿においては、大正8年の「漢字整理案」<sup>(15)</sup>、大正12年の「常用漢字」<sup>(16)</sup>、並びに明治33年の「小学校令施行規則」の「第三号表」<sup>(17)</sup>の3表を参照した<sup>(18)</sup>。『世界商売往来』の漢字606種のうち、比較対象と一致した漢字の数は次のとおりである。

M33 第三号表	T8 漢字整理案	T12 常用漢字
304種	459種	360種

『世界商売往来』の漢字のうち、明治33年の「第三号表」とは50.2%、大正8年の「漢字整理案」とは75.7%、大正12年の「常用漢字」とは59.4%が共通している結果となった。明治33年の「小学校令施行規則」においては、〈尋常小学校ニ於テ教授ニ用フル漢字ハ成ルヘク第三号表ニ掲クル文字ノ範囲内ニ於テ之ヲ選フヘシ〉とあり、表を見ると1,200字が掲載されている。この時点で『世界商売往来』の漢字の半数近くが、教授する漢字の目安となる「第三号表」には掲載されていない。つまり、『世界商売往来』に使われる漢字の約半分は教授には適さないとと言えるのである。

大正8年の「漢字整理案」においては、〈尋常小学校の各種教科書に使用せる漢字二千六百余字に就きて、字形の整理を行ひ、其の標準を定めたるものなり〉とある。『世界商売往来』の7割以上の漢字が共通しているのは、「第三号表」と比べて表の収録字数が増えたことと、教科書が整備され基礎から専門まで内容が充実したことに伴い、使用される漢字が増えたことが関係していると考えられる。

大正12年の「常用漢字」においては常用漢字が1,962字、略字が154字とされた。大正8年の「整理案」に比べると共通する漢字が減少したことになるが、これは漢字の整理が進み、分母が減ったためだろう。この時点で、『世界商売往来』が出版されてから約50年が経過しており、日常や教育の場において必要とされる漢字と、『世界商売往来』所載の漢字との隔たりが大きくなったのだと考えられる。実際、『世界商売往来』の漢字種のうち、大正8年の「漢字整理案」には載っているが、大正12年の「常用漢字」からは消えた漢字が109種ある。字体の問題もあるが、おおよそこれらの漢字は「常用漢字」には必要ないと判断されたのだと考えられる。

また、『世界商売往来』と「漢字整理案」「常用漢字」「第三号表」すべてで共通している漢字は269種あった。漢字種のうちの約4割が教授に適した漢字あるいは日常の漢字と判断されたのだといえる。今その一部を示すと次のようになる。

鞍 以 易 衣 引 雨 瓜 遠 鉛 往 黄 桶 音 下 加 家 火 花 荷 菓 貨 過  
海 開 外 各 鎌 寒 卷 艦 関 丸 眼 机 旗 機 規 騎 儀 吉 詰 及 牛 去  
魚 競 鏡 曲 玉 金

では、『世界商売往来』には用いられているが、「漢字整理案」「常用漢字」「第三号表」のい

れにも掲載されていない漢字にはどのようなものがあるだろうか。これらの漢字は131種あり、その一部を下に挙げる。

兜 砧 沓 圭 鷄 喧 牽 鹼 鵠 擦 仔 鳴 渚 礁 糟 狸 酎 柘 杜 砥 套 鐙  
 橡 莫 畢 葡 蕪 蔽 窺 鞭 菩 庖 麵 酪 鷺 俎 匕 唧 囂 壘 婢 罵 扱 撥  
 枷 梟 榭 椰 榴 榭

約2割の漢字が表外の漢字という結果になっている。これらは、日常や教育の場において重要度が低いとされたのであろう。中には、「乾酪」(カンラク)や「唧筒」(ポンプ)のように、漢字から仮名へと表記の主流が変わったために、表に採用されなくなったのではないと思われる例もある。

ここまで見てきたように、『世界商売往来』に使用されている漢字には、比較対象とした資料や表においても掲載されている漢字もあれば、比較対象には現れなかった漢字もある。前者は『商売往来』や『単語篇』を読めば一度は目に触れる漢字であり、これらの読者にとっては比較的なじみのある漢字であろう。また、「常用漢字」等の表に掲載されている漢字は、やはり日常の場面や教育の場で目にする機会のある漢字のため、人々にとってはなじみやすい漢字であったろう。反対に、後者の漢字は『世界商売往来』独自の漢字と言える。これらは、『商売往来』や『単語篇』にも一切現れず、また「常用漢字」等の表にも掲載されておらず、そのために人々にとっても目にする機会に乏しく、なじみの薄い漢字である。

### 3.3 熟字訓

ここまで、漢字の字数や字種について見てきたが、本節では漢字の用法に目を向けたい。

『世界商売往来』の本文には、「以太里」<sup>イタリー</sup>「知古辣」<sup>チヨコレート</sup>のように外国語の音を表現するため漢字音を利用した表記や、「菜豆」<sup>インゲン</sup>「衣袋」<sup>カクシ</sup>のように本文の漢字音と振り仮名とが一致しない表記等の、いわゆる「熟字訓」が散見される。ここでは『世界商売往来』における熟字訓に注目して、その特徴について考える。

一般に「熟字訓」とは、「漢字二字、三字などの熟字を訓読すること」<sup>(19)</sup>である。つまり、二字以上の漢字から成る語(熟字)の読みに日本語を結びつけることと言える。上に挙げた例においても、「以太里」という熟字に「イタリー」という日本語が、「菜豆」という熟字に「インゲン」という日本語が結びつけられている。

一方、本稿でいう熟字訓とは、「漢字の読みに日本語を結びつける」という認識を前提とした上で、おおまかに〈振り仮名で示した語を表示するために、漢字が本来もつ字義を無視し字音を利用して漢字表記すること〉と〈振り仮名で示した語を表示するために、漢字が本来もつ字音字訓<sup>(20)</sup>を無視し字義を利用して漢字表記すること〉の2つに分かれる<sup>(21)</sup>。前者は上で挙げた例でいうと「以太里」<sup>イタリー</sup>「知古辣」<sup>チヨコレート</sup>が相当し、音訳漢字である。そして後者は「菜豆」<sup>インゲン</sup>「衣袋」<sup>カクシ</sup>が相当し、

音訳を含まない。本稿における熟字訓の認定基準をより細かく示せば次のようになる。

A 〈振り仮名で示した語を表示するために、漢字が本来もつ字義を無視し字音を利用した漢字表記〉

(A1) 語が音訳漢字のみで表記されている例

(A2) 語が音訳漢字と別の要素の組み合わせで表記されている例

B 〈振り仮名で示した語を表示するために、漢字が本来もつ字音・字訓を無視し字義を利用した漢字表記〉

(B1) 語を構成する漢字の字音字訓のすべてが振り仮名と結びつかない例

(B2) 語を構成する漢字の字音字訓の一部が振り仮名と結びつかない例

(B3) その他

この基準に則って『世界商売往来』の本文から熟字訓と考えられる語を抽出すると166語あった。その内訳を示すと、(A1) 9語、(A2) 5語、(B1) 73語、(B2) 74語、(B3) 5語である。

では、実際にどのような語があったかを見る。

(A1) 語が音訳漢字のみで表記されている例 9語

イタリー オランダ カノン コッビー シナ チョコレート テュルク フロイス ロッシア  
以太里 和蘭陀 加農 架菲 支那 知古辣 土耳其 普魯士 義羅斯

9語のうち、6語が国名となっている。現代で目にする表記とは異なる漢字が用いられているのが目立つ。例えばイタリアの「イ」には「伊」ではなく「以」が、「リ」には「利」ではなく「里」が用いられている。

もう一つ注目したいのが「コーヒー」に対応している漢字「架菲」である。現代では漢字で書くとなれば「珈琲」であろう。『日本国語大辞典』にも「珈琲」と示されており、『言海』でも同様である。更に、『世界商売往来』の10年前に編纂された『英和对訳袖珍辞書』にも「珈琲」とあり、ロブシャイドの『英華字典』でも「珈琲」と示されている。『世界商売往来』の著者橋爪は洋学関係の書籍を数多く出版しているから、「珈琲」という表記を知らなかったとは考え難い。「架菲」は『世界商売往来』独自の表記と言えようか<sup>(22)</sup>。

(A2) 語が音訳漢字と別の要素の組み合わせで表記されている例 5語

アレキシユ イギリスコク サンハンシュ ハルチツク フランスコク  
亜瀝酒 英吉利國 三鞭酒 波羅的海 佛蘭私國

これらの語は、「英吉利+國」「亜瀝+酒」「波羅的+海」のごとく、音訳と別要素の組み合わせから成る。「波羅的海」のみ「海」に「カイ」と振り仮名がないため少し異質であるが、ここでは「ハルチツク」と「波羅的」が結びつき、それに「海」が別要素として加わったものと解し、A2に分類した。

(B1) 語を構成する漢字の字音字訓のすべてが振り仮名と結びつかない例 73語

この分類は更に細かく分けられる。詳細は次のとおりである。

明治初期の初等教育における漢字使用の実態

①字義で舶来の物品の説明をしつつ、振り仮名で外来語形を示す例 5語

コンハス シヤボン ホルク ボンベン ボンブ  
両脚 石鹼 食叉 爆丸 唧筒

②字義で舶来の物品の説明をしつつ、振り仮名には説明的な日本語を用いる例 10語

ウハカケ カクシ カホカケ クワイチウテヌクヒ ジシヤク シタギ ツケギ テツキノトクリ トモノヘヤ ヘサキ  
外套 衣袋 面衣 袋巾 礎針盤 襦衣 引火奴 具把壘 船尾房 船胸

③既存の表記を使用する例 21語

アヒル イチヂク カウモリ カタツムリ カナトコ カネサシ カハセ カラザホ クモ クルミ  
家鴨 ★無花果 ★蝙蝠 ★蝸牛 ★鉄砧 ★曲短<sup>(23)</sup> ★爲替 ★連枷 ★蜘蛛 ★胡桃  
ジヨウゴ ダイコ タウモロコシ トカゲ トネリコ ニンジン ヒキガヘル ビロウド フリツク ホトトギス ヒバリ シタヒラメ  
漏斗 ★蘿蔔 玉蜀黍 蜥蜴 秦皮 ★胡蘿蔔 蟾蜍 ★天鵝絨 ★杜鵑 告天子 鞋底魚

④その他 37語

アラムシ イソカイ インゲン オツトセイ オモリ オランダイチゴ カラクンテウ クギスキ サケ シンチウ ツウジ テタイ トウナス  
螟蛉 渚菜 菜豆 海狗 測鉛 平菓 百露國雞 千斥 過臘魚 黃銅 譯官 管家 南瓜  
トケイ ドングリ ナカマ ニシン ノミクチ バツタ ハヤテ ハントウ ベットウ ホクチ ホンバコ マヒル マルブシユカン  
時辰儀 橡実 會社 糟白魚 注管 鼠蝨 颶風 主管 厩奴 引火祭 書匡 正午 檸檬  
ミガキヤウジ ラカン ロクク ロクク シホノミチヒ セビ ツツ ネジ アナ フリツク メリヤス ヤギ  
牙掃 薰肉 牽鎖盤 満潮及退潮 滑車 炮銃 螺旋 山毛櫨 鐵葉 莫大小 山羊

①と②は舶来の品を対象に、漢字の字義によってその物の形状や用途を示していると考えられる。①では外来語形を振り仮名で提示している一方、②では振り仮名で外来語形を示さず、説明的な日本語を加えている。なぜ②では振り仮名で外来語形を示さなかったのであろうか。例えば「外套」「引火奴」を「外套」「引火奴」<sup>(24)</sup>としても良いように思われるが、その基準は明らかではない。

③は『世界商売往来』刊行以前、すなわち明治4年よりも前に同様の漢字と読みの組み合わせが確認<sup>(25)</sup>できた例である。★は『大全早引節用集』にも同様の表記と振り仮名が示されていることを表す。橋爪が何を参照して『世界商売往来』を著したかは詳らかになっていないが、『大全早引節用集』と表記・読みが一致したということは、このような表記が当時ある程度社会に共有されていたことにつながると思われる。

④はB1のうち①～③に当て嵌らないと判断した例である。いずれも『大全早引節用集』や『改正商売往来』の表記と一致しない、あるいはそもそも単語が収録されていない等、出典を確認できないため「その他」とした。この中には「主管」「満潮及退潮」「牙掃」「薰肉」のように橋爪が考案したのではないかとと思われる例もある。また、頭書に「lemon 檸檬」「apple 平菓」とあるにも関わらず、本文において「檸檬」「平菓」とあり、橋爪の誤りと考えられる例もある。

(B2) 語を構成する漢字の字音字訓の一部が振り仮名と結びつかない例 74語

こちらも更に分類することができる。

①漢字の字音字訓と振り仮名が一致している要素と、漢字の字音字訓と振り仮名が一致していな

い要素の組み合わせから成る例 48語

アサヌノ アマタ アヲガネ イカリツナ イワシマ インゲンマメ ウリテ エリマキ オオウハギ カイテ カナテコ カハヤナギ  
亜麻布 ★数多 青銅 錨鎖 礁崑 菜豆 賣人 頸卷 大上衣 買人 ★鉄槌 ★水楊  
カラスムギ キウリ キリンキウシ キリンキムマ クシマハシ クスリイレ ゲジヨ シジャウバシヨウツツ ジヤガタイモ ジヤクロイシ シヤコ  
燕麦 ★胡瓜 驢牛 驢馬 串架 葉包盒 下婢 施條馬上銃 馬鈴薯 柘榴石 ★鷓胡  
シロブドフシユ ソラメ タモトケイ チクシンギヨ テクビカサリ テヌグヒ テフクロ トウリギツテ トタン ニコゴリグチ ニホヒアブ  
白馬乳酒 ★蠶豆 袂時斗 竹籤魚 手釧 手巾 手套 往来切手 鉛鉛 艙口 香油

ニホビビン ヒウチガマ ヒ ダ ラ ヒドケイ ヒヨウラウイレ ハウレンソウ ボタンノアナ マキタバコイレ マクハウリ マルバヤナギ ミヅモリ  
 香瓶 火鎌 乾大口魚 日晷表 兵糧囊 菠稜菜 鈕孔 卷煙草入 甜瓜 白楊 水準  
 ★眼鏡 草綿 ★夜半

②漢字の字音字訓と振り仮名が一致している要素と、補足的な要素の組み合わせから成る例 21語

イカリ イノシシ イワシ カキ カブ カマレス キリギリス クハノミ クビワ ザル シカ スミ スミイレ  
 錨児 野猪 鯧魚 牡蠣 蕪菁 喧囂し 蠡斯 桑椹 馬首環 笊籬 鹿麋 墨汁 墨汁壺  
 チサ テウ ナシ ハガネ ハツカネズミ フイゴ ボタン ミツ  
 蒿苳 蛭蝶 沙梨 鋼鉄 鼯鼠 鼓鞴 扣鈕 精密

③振り仮名から想像される漢字の並び方と、実際の並び方とが逆転している例 2語

コヒツジ ヒザカケ  
 羊仔 蔽膝

④その他 3語

ハミガキ ミミカキ ワサビオロシ  
 磨齒散 窆耳子 薑擦子

①は「錨鎖」のように、「錨」という字訓と振り仮名が一致している要素と、「鎖」という字訓と振り仮名が一致していない要素から成る。★は『大全早引節用集』でも同じ表記が確認できたことを示す。中には「胡瓜」「馬鈴薯」「柘榴石」「蠶豆」「眼鏡」等、現代でも使用されている表記も含まれているが、一方で「手巾」「手套」のごとく見慣れない表記もある。「手巾」「手套」に関して言えば、『商売往来』や『言海』でも見られない表記のため、『世界商売往来』独自のものかと思われる。また、「白馬乳酒」「竹籤魚」<sup>(26)</sup>のように誤りではないかと考えられる例もある。

②には「錨児」の「錨」のように、その漢字の字音字訓が振り仮名と対応する一方で、「児」が宙に浮いているかのように見える例を集めた。余っているように見えるとは言えこうした漢字に役割がない訳ではなく、語の意味の強調や補足を行っているものが多い。例えば「蕪菁」について見ると、どちらの漢字も植物のカブを指し、意味の強調、あるいはどちらか片方の漢字しか知らなくても理解できるよう工夫しているのだと考えられる。

(B3) その他 5語

キヨホウ ハルビ モルチール ラシヤ ルイセン  
 白砲 腹帯 忽微礮 哆囉呢 螺旋

(B1) (B2) のどちらにも当てはまらなると判断した例をB3とした。「腹帯」は短縮形、「白砲」「螺旋」は誤った字音の表示であろう。

以上のように、『世界商売往来』には様々な特徴を備えた熟字訓が使用されている。中には節用集と同じ表記も見られ、江戸時代以来の熟字訓が引き継がれていることが分かる。その一方で他の資料には見られない、『世界商売往来』独自の表記と目されるものも存在した。ここで紹介した熟字訓の表記の由来や、『世界商売往来』以後も同様の表記が見られる資料があるのかといった問題については更なる調査が必要である。

#### 4. 終わりに

本稿では『世界商売往来』を資料として、そこに使用される漢字について調査し、明治初期の教育現場における漢字の使用実態の一端を明らかにしようと試みた。最初に『世界商売往来』に

## 明治初期の初等教育における漢字使用の実態

における使用漢字数や、使用率の高い漢字について見た。『商売往来』と『世界商売往来』を比較すると、『商売往来』では文末に多用された「可」「也」等の漢字が『世界商売往来』では見られず、文体の違いが使用率の高い漢字の違いに影響している結果となった。また、『世界商売往来』では飛び抜けて使用率の高い漢字が見られなかった。これによって様々な分野から単語を集めて列挙するという本書の性質が、漢字使用率の面からも浮き彫りとなった。次に『世界商売往来』に現れる漢字が他の資料にも現れるかを調査した。

『世界商売往来』は続編以降も刊行されているため、それらの調査を行う必要がある。他の教科書についても調査を進め、明治初期の教育現場における漢字の使用実態をより詳細に把握したい。また、本稿では触れることができなかった、熟字訓ではないと判断した語の表記について、『商売往来』『改正商売往来』や各種節用集と比較・検討を行いたい。ある語が資料によって表記がどう変化するのか、時代による違いがあるのかを知ることで、明治期だけではなくそこに至るまでの表記の歴史を明らかにすることができ、より多様な表記の世界を知ることができる。

### 注

- (1) 以下、本稿では『世界商売往来』所載の語を例示することがあるが、その際仮名は現行の字体に改めている。漢字字体はなるべく原文に近い字体を示すことにした。仮名遣いや濁点の有無については、原文に従っている。
- (2) 故那珂博士功績記念会編『那珂通世遺書』「文学博士那珂通世君伝」p.12
- (3) 文部科学省の「学制百年史」によると、小学教則は、学制発布の翌月に公布された、小学校における教科課程および教授方法の基本方針である。小学を上下に二分し、さらに八級に分け、下等八級～上等一級に至るまでの授業時間や教科、教科書の基準、教授方法について大要を示している。
- (4) 「ジャパナレッジ」のオンライン版を利用した。
- (5) 大正12年5月9日官報第3230号付録および大正12年5月12日官報第3233号付録を参照。
- (6) 三好（1990）の分類による。
- (7) 明治6年出版 黒田麴廬（行元）著、丁子屋栄助刊。
- (8) 「近代教科書デジタルアーカイブ」で閲覧。全3冊だが、第3巻は国名を特集しているため除外した。
- (9) 黒田麴廬 1827～1892。日本で初めて『ロビンソン・クルーソー漂流記』を和訳（『漂荒紀事』）した人物として知られる。
- (10) 元禄6年の刊記あり 酒田市立図書館蔵、須原屋茂兵衛ほか刊（以下『商売往来 a』とする）と、安永9年出版 早稲田大学図書館蔵、耕書堂刊（以下『商売往来 b』とする）の2冊である。両者には収録語や語の掲載順、語の漢字表記に若干の異同が存在する。本文系統については改めて検討する必要があるが、本稿では便宜上、この2冊を参照する。
- (11) 天保14年版大全早引節用集。イロハ順・仮名数別の検索法である。
- (12) 小数点第二位を四捨五入している。
- (13) 便宜上、異体字の関係にある漢字は別のものとして数えた。また、『単語篇1』と『2』で重複する漢字もあるため、『単語篇1・2』の値は『単語篇1』と『2』の値を足した値とは一致しない。
- (14) 『世界商売往来』においては漢字下部の「虫」が2つあるが、入力都合上、この字体としている。
- (15) 文化庁 国語施策沿革資料11 漢字字体資料集を参照。

- (16) 大正12年5月9日官報第3230号付録および大正12年5月12日官報第3233号 国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧。
- (17) 佐藤喜代治編(1988)『漢字講座12 漢字教育』付録「小学校学年別配当漢字の変遷表」参照。
- (18) 字体に関して、表に掲出された「本字」および「略字」「許容字体」を参照したが、文字入力の都合や参照した資料における文字の潰れ等の理由から、完全には入力できていない箇所がある。
- (19) 『日本国語大辞典』のオンライン版を参照。
- (20) 字音・字訓については現行のものを基準とした。それぞれ『大漢和辞典』と『漢辞海』を参照した。
- (21) ここでは漢字二字以上から成る語を対象としているが、漢字一字の語にも注目すべき点がある。例えば「蠅<sup>ハイ</sup>」は訛音形、「艙<sup>ニコゴリ</sup>」は船倉を意味する「こおり」の訛音形と思われる。なぜこの語形が採用されたのかについては改めて検討したい。
- (22) 『改正商売往来』には「可喜<sup>カヘイ</sup>」や「可喜豆<sup>カヘイマメ</sup>」という語が見え、「珈琲」や「架非」はない。『言海』の「コウヒイ」の条に「カヘイ」とあるため、「可喜<sup>カヘイ</sup>」がコーヒーのことを指すかと思われるが確証はない。橋爪にしろ、『改正商売往来』の著者黒田にしろ、洋学に明るい人物であったから、「珈琲」表記を知りつつあえて独自の表記を追求したのであろうか。
- (23) 振り仮名の語形は、頭書の英単語に付された振り仮名である。なお、『改正商売往来』では「外套」に「まんてる」、「火奴」に「めつち」という振り仮名が付されている。
- (24) 『大全早引節用集』には「曲<sup>マ</sup>尺<sup>ネ</sup>」とある。
- (25) 『日本国語大辞典』を参照。
- (26) 『大全早引節用集』に「竹筴魚(アヂ)」とある。「籤」と「筴」を誤ったのであろうか。

#### 参考文献

- 天野晴子・石川松太郎(1987)「『世界商売往来系』の記事内容とその史的意義について—食生活関係収録語彙の調査を中心に—」『人間研究』(23)
- 石川謙・石川松太郎編(1968)『日本教科書大系往来編第12巻』講談社
- 大槻文彦(1904)『言海』(ちくま学芸文庫版)
- 小泉吉永編(2001)『往来物解題辞典解題編』大空社
- 故那珂博士功績記念会編(1915)『那珂通世遺書』大日本図書
- 佐藤喜代治編(1988)『漢字講座12 漢字教育』
- 佐藤貴裕(2019)『近世節用集史の研究』武蔵野書院
- 高木まさき(1992)「『単語篇』の研究」『人文科教育研究』(19)
- 高梨信博(1988)「国語教科書の漢字」『漢字講座8 近代日本語と漢字』
- 谷清子(1989)「世界商売往来系に採られた英語教材—比較教育学的視点からの考察—」『人間研究』(25)
- 平田守衛編(1990)『黒田麴廬の業績と『漂荒紀事』』京都大学学術出版会
- 三好信浩(1990)「明治初期民間啓蒙家の著作活動—橋爪貫一の場合—」『広島大学教育学部紀要 第1部』(38)
- 安田敏明(2016)『漢字廃止の思想史』平凡社

「ジャパナレッジ」

「国立国会図書館デジタルコレクション」

- <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950907> (2021年8月15日最終閲覧)
- <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2955353> (2021年8月15日最終閲覧)
- <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2955356> (2021年8月22日最終閲覧)
- <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/788017> (2021年8月22日最終閲覧)

## 明治初期の初等教育における漢字使用の実態

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904334> (2021年10月13日最終閲覧)

「近代教科書デジタルアーカイブ」

<https://nieropac.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/advanced/?lang=0> (2021年8月17日最終閲覧)

「古典籍総合データベース」

<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> (2021年8月17日最終閲覧)

「日本古典籍総合目録データベース」

<https://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/> (2021年8月17日最終閲覧)

「学制百年史」

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm) (2021年10月13日最終閲覧)

「文化庁 国語施策沿革資料11 漢字字体資料集」

[https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/sisaku/enkaku/enkaku11.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/sisaku/enkaku/enkaku11.html) (2021年7月18日最終閲覧)